

## 読解力向上のための教科連携への一歩

—国語科と社会科の連携 鲁迅作「故郷」の実践を通して—

豊川市立東部中学校 教諭 松本 充弘

### はじめに

読解力とは、「文章を読んでその意味を理解する力。文章の意味を読み取る力」と一般的には考えられている。それでは、本研究でいう「読解力」とは、どのようなものであるか。また、本研究での「読解力」が、従来の国語科でいう読解力とどのような差異があるのかを、まず明らかにすることから始めなければならない。

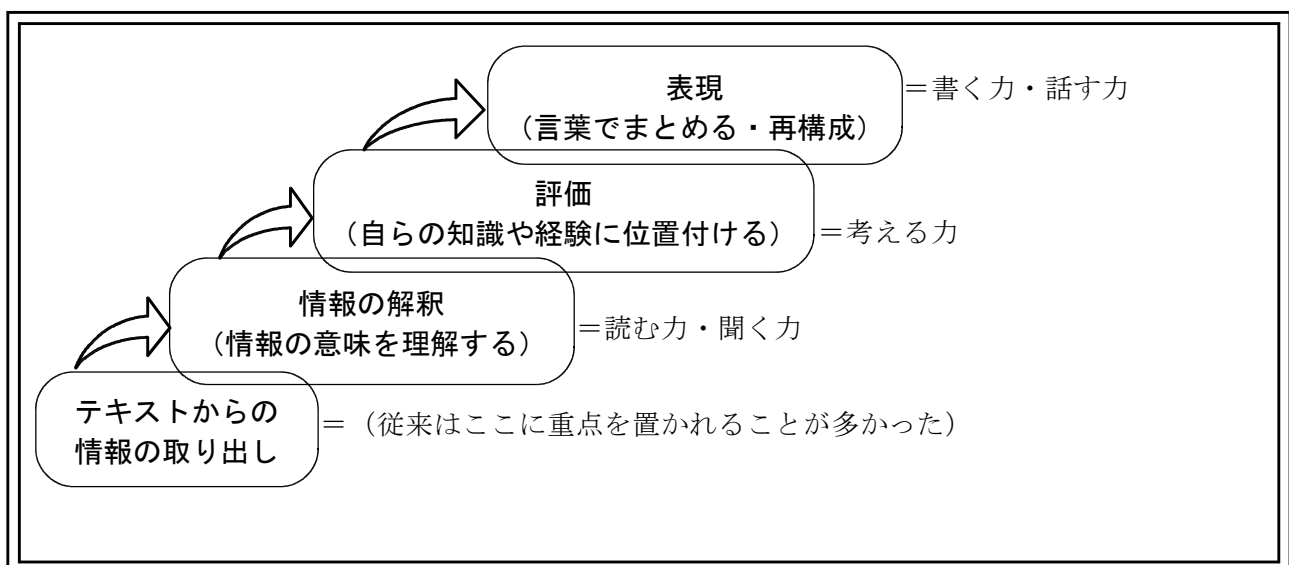
従来の国語科では「文章を正確に読み取る力」を育てる学習活動に重点が置かれることが多かった。例えば、題材が文学作品ならば「作品中の登場人物の心情を読み取る力」であり、説明的文章であれば「段落相互の関係をとらえながら筆者の意図を知る」というようなものである。このように読解力は「読み取り、理解する力」ととらえることが妥当であろう。

しかし、本研究で言う「読解力」とは、いわゆる「PISA型読解力」であり、従来の「読み取り、理解する力」とは、ニュアンスが異なるものである。その定義は以下のようなものである。

文字だけでなく、図表やグラフまで含めた資料の意味を、分析的・批判的に読み取り、解釈し、自分の意見として表現する力

大きくいえば、総合判断をするための読み取ったことの再構成とも言え、相互を関連付ける力に近いと定義されている。つまり「PISA型読解力」は、実践的な能力の育成を目指したものとなる。図示すれば下のようである。(図1)

図1 学びのプロセスとしてもとえられるPISA型読解力



## 1 研究の目的

文学作品の読解をする上で、主題の読み取りをすることが多い。この場合、多くは作品の内容を理解し、それを手掛かりに主題を探っていくという学習指導計画を立てて実践してきた。主題を読み取るために、作品の中に描かれている当時の時代背景や社会の動きをつかむことは大切である。それに加えて、作品とは別の次元で当時の時代背景などを知ることができれば、主題の読み取りもより深いものになるのではないかと考えた。特に現代の社会を描いた作品ならば、実感としてとらえることは可能であるが、時代をさかのぼる作品では、時代背景を的確にとらえなければ主題に迫りにくいものもある。そのために必要となるのが、専門的な知識であろう。専門的な知識の習得は、深い読み取りにつながり、より意欲的な表現に結び付く。すなわち、PISA型読解力の習得につながると考える。そこで、良質な知識を身に付けさせるため、国語科と社会科の教科連携を図った取組を学習指導計画に組み込んだ実践を行うことにした。

そこで、次のような仮説を立て、研究を進める。

作品の読み取り学習に専門的な知識を得る学習を取り入れれば、主題の読み取りが深くなり、主人公の心情だけでなく作品に込められた作者の思いを感じられるようになる。また、主題を読み取る過程で、テキストから取り出した情報とゲストティーチャーから得た専門的な情報を総合的に判断し、再構成して自分なりの思いをもち、それを表現することができるようになる。

作品の大意を読み取る → 専門的な知識を得る → 作品の主題を読み取る → 表現  
(ゲストティーチャーを招いて)

## 2 研究の手だて

様々な形で得られた情報を、総合的に判断し、再構成し、表現する学習プロセスを進める場合、テキストから得た情報だけでは、最終段階である表現活動がなかなか充実しないという思いがあった。その原因の一つは、テキストから得られる情報が不足していることである。そこで、不足しがちな情報を補い、より専門的な情報を提供するための手段として考えられるのが教科連携である。最終段階の表現活動をより確かなものにするためには、専門的な立場から関連する情報を提供してもらうことで、国語科の授業だけでは得られない、細かな部分まで情報が得られるであろう。

より多くの専門的な情報を提供してもらうには、専門家に教えてもらうのがよい。実際に外部からゲストティーチャーを招き、講演してもらうことはよく行われている。しかし、このように外部からの専門家をゲストティーチャーとして招く場合には、メリットと共に幾つかのデメリットもある。例えば、どのようなことを話してもらうかと

図2 外部及び教員のゲストティーチャーのメリットとデメリット

○外部のゲストティーチャー	
メリット	・多種多様な専門家がいる。 ・経験やもっている技術が多彩である。 ・授業に変化が出る。
デメリット	・打合せに時間がかかる。 ・話が不得意な場合もある。
○教員のゲストティーチャー	
メリット	・打合せが比較的容易である。 ・生徒の状態に応じて対応できる。 ・授業に変化が出る。
デメリット	・時間調整が難しい。

いう打合せに時間がかかること、ゲストティーチャーが必ずしも教育の専門家ではなく、中には話すことを苦手とする方がいるということなどである。そこで校内に目を向けた。中学校には、各教科を専門とする職員がそろっている。しかし、現状ではその専門性を機能的に活用するという場面は少ない。職員室内で教材研究を進める際に尋ねることはあっても、学習指導計画の中に他教科の先生をゲストティーチャーとして招き、直接生徒への講義をしてもらうことはあまり見られない。そこで、学習指導計画に他教科の教員をゲストティーチャーとしたミニ講演を盛り込んだ実践を試みることを考えた。これによって外部からゲストティーチャーを招いた場合の障害も少なくなると考えた。(図2)

### 3 研究の内容(3年 魯迅作「故郷」光村図書)

本実践の題材を、魯迅作「故郷」とし、この作品に込められた作者の思いを探るため、当時の中国社会の様子や民衆の生活などについて、社会科の先生にミニ講演をしてもらい、作品の読み取りと講演内容の両面から主題に迫る学習過程を考えた。

魯迅作「故郷」は、作者の体験を基に、当時の中国社会の墮落と、新しい社会を築いていきたいという夢を、広く国民に広げようという思いの下に書かれた作品である。この作品の主題をより深く読み取るに当たり、専門的な知識が必要となった。例えば、当時の中国の国内事情がどうであったのか、また、作品中にある「子だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主」がどのような状況でルントウをでくのぼうのような人間にしたのかなどである。こうした作品の書かれた時代背景が理解できなければ、作者が訴えかけることを正確に理解することは困難になる。そこで、その手だてとして社会科との連携を考えた。

具体的には、辛亥革命を挟んだ中国の歴史をミニ講演として、国語科の授業に取り込み、社会情勢を知る時間を設定するものである。

これから述べる第一次実践は平成19年度に実施したもので、第二次実践は、第一次実践の反省を基に平成20年度に実践したものである。

#### (1) 第一次実践(平成19年9月実践)

事前に講演を担当する教員と共に、短時間ではあるが共同で教材研究を行った。作品「故郷」を読むとともに、魯迅の生きた時代について説明してもらった。その後、授業では当時の中国の民衆がどのような生活を送っていたのかなど、次の3点についてミニ講演に盛り込んでもらうよう依頼した。

- ① 当時の中国社会の情勢(混乱の時期である)
- ② 当時の一般民衆の生活の様子
- ③ 辛亥革命前後の中国の歴史(民衆の税負担割合が革命の大きな理由である)

上記のことを織り交ぜ、「故郷」が書かれた時代背景や、文中に出てくる「重い税金」「兵隊」などの理由がはっきり分かるようなミニ講演としてもらった。

一人調べを行い、自分で

#### 【資料1 ミニ講演(K先生)の要約】

背景を探ることも大切なことであるが、ミニ講演で整理された話を聞くことで、大幅な時間短縮になったことは間違いない。生徒の意識の中には、国語の授業に

当時の中国は、国自体が貧乏だった。それは、日本とかなり深い関係にある。中国国内では、清王朝も末期となり、地方まで政治の力が及ばず、内乱が起きている上に、日清戦争に敗れ、多額の賠償金を払わなければならなかった。そこで、孫文が「三民主義」を唱え辛亥革命を起こした。しかし、結局は半分成功し半分は失敗した。その結果、民衆の生活は楽にはならなかった。

社会科の先生を招いての授業であったため、新鮮さを感じていたことが、授業の感想に書かれていた。問題点としては、話を聞きながらノートをとっていたため、書くことに意識が集中してしまったという点が挙げられる。

このミニ講演は、授業時間の関係で、複数の教員に実施してもらった。講演内容の切り口や、話に織り交ぜるエピソードなど、それぞれの教員の個性が出ていた。(資料1, 2)



講演する社会科教員

ミニ講演会を開くに当たり、3人の社会科の先生に依頼したが、それぞれ長所も短所もある講演内容となった。授業の進度との関係で、クラスによって導入部分での実施、単元半ばでの実施、終末での実施など時期がそれぞれ異なってしまった。

### 【資料3 生徒のノート】

K先生の話を聞いて「なぜルントウはこうなったのか」  
・軍閥という中国を欧米化しようとした人々が少しくちを強くしようとし、重い税金をかけた。税金をまくし立てていくのは、役人や地主で彼らもまたお金が欲しいので、どんどん人民はお金がなくなる。税金がなくなると、生活ができなくなるから、ものを盗んだり、匪賊がやってきたりする。結果的にルントウが貧しくなってしまう。ルントウは古い中国派だからよいになってしまふ。

### 【資料2 ミニ講演(T先生)の要約】

清は古い中国の形である。例えば、作品に出てくる「偶像崇拜」もその名残である。そんなときに日清戦争が起きる。多額の賠償を負った中国の若い知識人が、このままでは中国がつぶれてしまうと考え、辛亥革命を起こす。その革命で中国は欧米化を目指した。しかし、そのために民衆にかかる税金の負担は、以前にも増して重くなった。その上、兵隊が権力をもち、軍閥として中国全土に広がっていった。辛亥革命では、「孫文が臨時大統領となり、アジア最初の共和国になった」と書いてあるので、さも成功したように思えるが、実際には新しい中国へと生まれ変わることはできず、袁世凱の独裁政治へと変わっていった。そのために、民衆の生活は、今まで以上に苦しくなっていた。

左はミニ講演会を終えての感想である。全体の疑問として、「ルントウは、なぜこんなふうに変ってしまったのか」について、文中では「子だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主、みんな寄ってたかって彼をいじめて、でくのぼうみたいな人間にしてしまったのだ」と書いてあるが、なぜ重い税金が課せられたのか、なぜ兵隊が原因になるのかなど、幾つかはその理由までは分からずにいたのが、このミニ講演で納得できたことがうかがえる。(資料3)

このように感想からは、講演内容を作品に書いてあることと重ね合わせて、そこから主題を読み取ろうという姿勢が見られる。主題の読み取りのために、正確に時代背景をとらえさせる必要から、社会科との教科連携を図ったことが、読解力の向上のための有効な手段であったと考える。

一方で、ミニ講演をより有効に生かすための課題が二つ出てきた。

#### 課題1 学習計画の中での位置付け

学習計画の中に位置付けることは、生徒の読み取りを深めることにつながることは実証できたのだが、学習過程のどの段階が最も効果的であろうか。生徒にも考えさせ、自分なりの結論を出す

ことは大切なことである。これらのことを考え合わせると、ミニ講演が一番効果的なのは、ある程度内容の理解が進む、終末になる直前ではないかと考える。

## 課題2 ミニ講演の内容

打合せのときに、前述したように「当時の中国社会の情勢（混乱の時期である）」「当時の一般民衆の生活の様子」「辛亥革命前後の中国の歴史（民衆の税負担割合が大きな理由）」という3点を盛り込んでくれるようお願いした。実際のミニ講演では、それぞれ3点について触れてくれたが、作品の中の言葉に注目させたいのでより具体的にする必要を感じた。

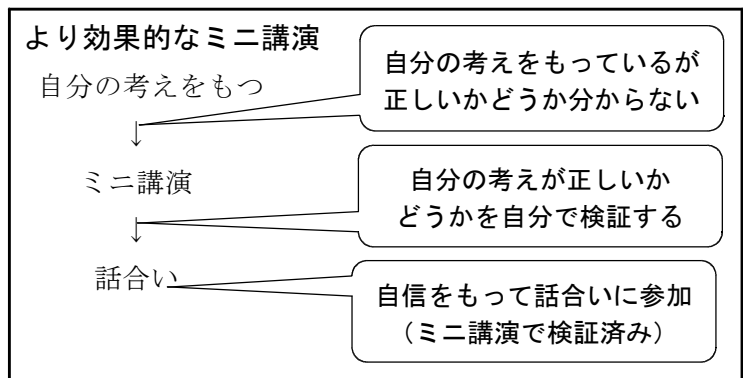
### (2) 第二次実践（平成20年9月実践）

第一次実践で浮かび上がった課題を、第二次実践では次のように改善して取り組んだ。

#### 【資料4 より効果的なミニ講演の位置付け】

#### 課題1について

単元構想の中での位置付けは第4時が効果的である。前時の終末で自分の考えを書いて終えるようにした。第3時の内容の読み取りで「ルントウの変化の原因は何だろう」という課題から出てきた「子だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主、みんな寄ってたかって彼をいじめて、でくのぼうみたいな人間にし



てしまったのだ」という部分でどのようにルントウの生活にかかわっていったのかを、自分なりにまとめたところでミニ講演を実施する。そしてミニ講演後に話合いをもつことにより、税金が重くなった原因や、何のための兵隊なのか、役人がなぜルントウを変えてしまったのかなど、一步踏み込んだ理解がなされると考える。（資料4）そこから、新しい世界とはどのような世界か、また、希望とは何か、さらに、この作品はだれに向けてのメッセージなのかという魯迅の思いへとつながっていくであろう。

### 《学習指導計画》

時	生徒の学習活動	育てたい「読解力」	連携する教科・内容
1	範読を聞き内容を知る。 ・新出漢字の学習 ・難解語句のチェック		
2	一次感想を書き生徒間交流 登場人物の関係をとらえる。 学習の流れを知る。 ・課題の確認	登場人物の人間関係を作品から読み取る。 （テキストからの情報の取り出し）	
3	内容の読み取り。 ・題名読み ・幼いころの思い出 ・ルントウの変化	内容を正確に読み取る。 （テキストからの情報の取り出し）	

4	中国の社会情勢を知る。  ホンルとシュイシヨンの新しい関係	<b>中国の状況と作品を重ね合わせながらミニ講演を聴く。</b> (解釈)  内容を正確に読み取る。 (テキストからの情報の取り出し)	社会科  ・日清戦争 義和団事件 ・辛亥革命 ※2年生7月の教材 ・農民の生活
5	主題を考える。 ・最終感想の生徒間交流	魯迅の作品に込められた思いを、当時の中国社会の情勢を元に考えて発表する。(解釈・評価・表現)	

## 課題2について

「辛亥革命がいつ起きたのか」「革命が目指したものは何か」「革命前の中国と革命後の中国の国民の生活はどのような変化があったのか」「孫文が唱えた三民主義とはどのようなものか」「清朝末期の中国社会の様子」「偶像崇拜とはどのようなもので、中国社会では偶像がどのように扱われていたのか」について、講演を担当する先生と話し合い、「故郷」につながるものを洗い出して講演内容に盛り込んでもらう。

これらの課題を解決するために講演会の打合せをした。この打合せでは、作品中にある言葉の理解につながるよう、より綿密にすることに留意した。

- ・革命前と革命後では民衆の生活は変わらない。
- ・「重い税金」は、日清戦争の賠償金に加え、義和団事件の賠償金の支払いが重なった。
- ・「兵隊」は、軍閥と考えられる。(徴兵ではなく、物資金品の徴収)
- ・「匪賊」は基本的には盗賊集団のことである。
- ・「役人」は中央から派遣されるが、中央からの統制は崩れてきていた。
- ・「地主」は、土地を貸した対価として法外なものをとる。
- ・「偶像崇拜」は、古い中国社会の象徴である。
- ・辛亥革命は1911年から始まり、孫文がその中心人物である。
- ・革命が目指したのは、民族の独立と民主主義国家。(欧米化をねらう)
- ・孫文が唱えた三民主義とは①民族の独立②政治の民主化③国民生活の安定である。
- ・清朝末期の中国社会は、中央集権が崩れ、地方ごとに軍閥が割拠し始めた。

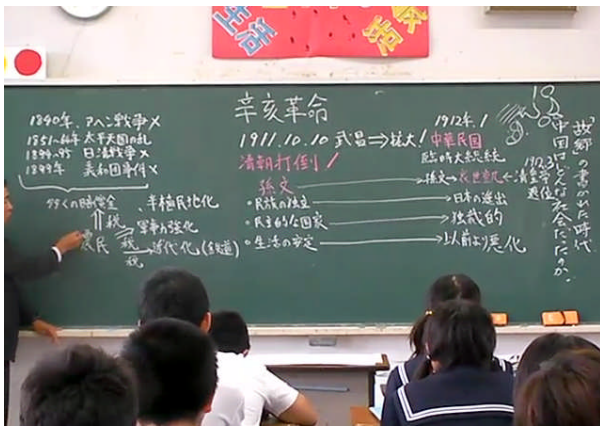
以上の点を組み合わせ、ミニ講演で話してもらうことにした。ただし、できる限り事実を分かりやすく話すという姿勢で臨んでもらうこととした。



導入に紙芝居を使って

### ア ミニ講演①(紙芝居を使って)

ミニ講演の導入として、ふだんの社会科の授業でも使う紙芝居を用いて辛亥革命が始まる経緯を話す。当時の中国社会がどのような状態なのかを理解するには辛亥革命以前に起きたアヘン戦争、太平天国の乱、日清戦争、義和団事件などによる多額の賠償金などで、いかに農民の生活が圧迫されていたかを知らなければならない。辛亥革命では孫文の掲げた三民主義が、中華民国の成立後どうなったのかを言葉だけではなく、その内容まで理解



ミニ講演の板書

こうした激動の中国の典型的な農民として描かれているルントウがでくのぼうのような人間になってしまうのも無理はないと感じていた。

イ ミニ講演② (プリントを使って)



プリントを使って

ミニ講演の時間を20分とし、多くの内容を整理して話す必要があったため、あらかじめ大筋をまとめたプリントを配付してミニ講演を行った。このプリントは、打合せの時にこちらで依頼した内容を盛り込みながら、社会科の教員が作成したものである。(文末資料1)

作品が書かれた時代背景と共に、作品中の言葉を具体的に示し、補足をするというスタイルで20分間の講演を依頼した。

ウ ミニ講演を終えて

右の感想は、ふだん積極的に発言をせず、静かに話を聞いている生徒の感想である。ミニ講演の内容から、農民の生活が苦しかった原因を知り、作品中に出てくる人物と結び付けて考えることができていることが分かる。(資料5)

資料6の生徒はなかなか自分の考えがもてないのだが、このミニ講演会では、作品の時代背景のイメージができたようである。

資料7の生徒は授業にはいつも積極的で、自分の考えをもつことができる。時代背景を知ること

【資料5 ミニ講演会の感想1】

特別授業の感想  
 当時の中国は敗戦や外国からの侵略のせいで農民の生活はすごく苦しいものだったことが分かりました。たくさんのものを奪われて重い税金もあったのでルントウやヤンおぼさんたちはあんなに変わってしまったんだろーと思いましたが。それプラス魯迅とは身分差もあったので二人の関係がくずれてしまうのも納得だなと思いました。

【資料6 ミニ講演の感想2】

この授業で、故郷をかけたころの中国の様子が分かりました。とても差別が厳しかったと思います。とても分りやすいこの頃の時代の背景が頭の中に浮かんでくるようでした。

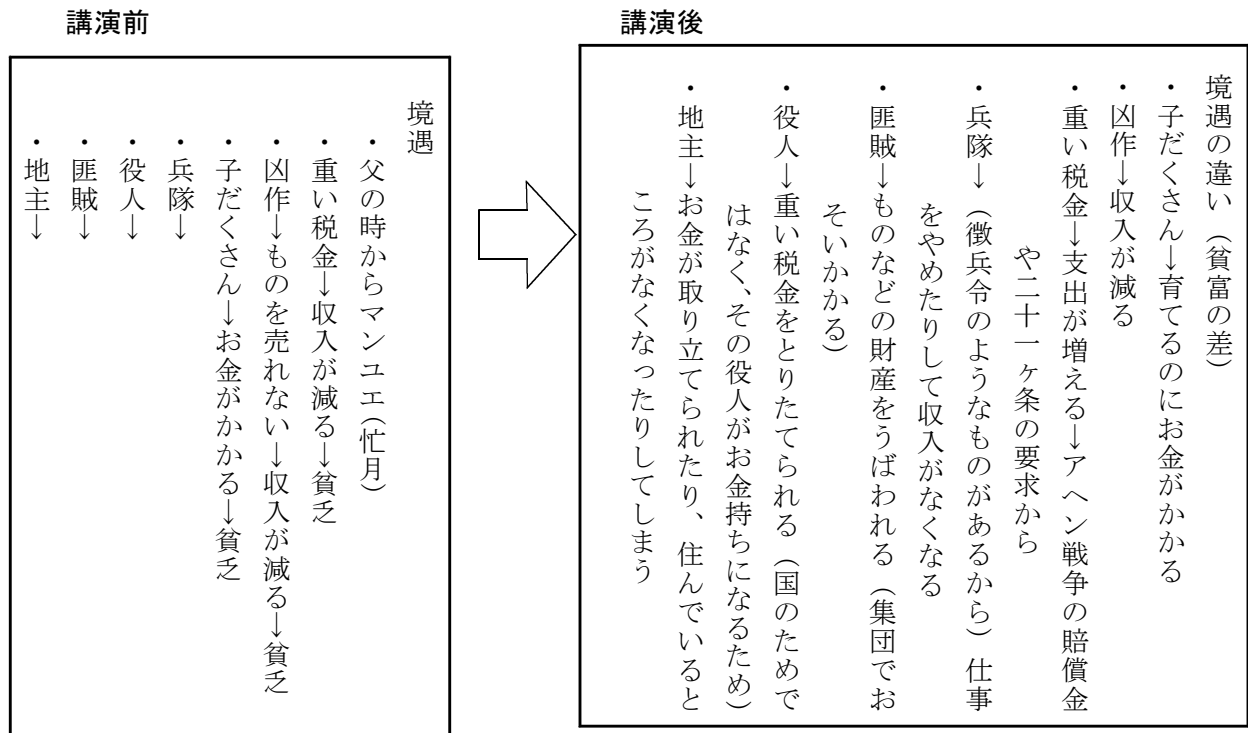
【資料7 ミニ講演の感想3】

特別授業の感想  
 ・久しぶりのK先生でうれしかったです。今まで物語を読むときに、ただ読むだけだったけど時代背景まで考えることで書いてなかったことや人物の奥にある心まで分かってくるようでした。

ここに挙げた以外にもミニ講演が読み取りに役立っていることが分かる感想が他にも見られた。

ミニ講演の後に、ルントウがでくのぼうのようになってしまった原因をまとめてみた。自分の考えが及ばなかった部分は、ミニ講演の内容で、それぞれの原因一つ一つがどのように結び付いたのかは、かなり理解できたようであった。ノートの記録から見てみると、次のような変化となっていた。

### 【資料8 ミニ講演前と後のノート】



原因を確認した後に、「ホンルとシュイションの新しい関係」についての話合いになった。発言の中には、直前のミニ講演で話を聞いた「孫文の三民主義」という言葉が出てきたり、その内容からも、ミニ講演会で得た情報が読み取りの場面で生かされていることが分かってきた。(資料8)

時代背景をミニ講演でつかみ、ルントウがでくのぼうみたいになってしまった後、最終段階の主題の意見交流に移った。以下はその授業記録である。(資料9)

### 【資料9 意見交流の授業記録】

- T1：魯迅は「故郷」でだれに、何を訴えたかったのだろうか。これについてみなさんの意見を聞いて、まとめにしたいと思います。
- C1：魯迅は「故郷」を読んだ人すべての人に、自分たちが経験できなかった新しい生活を手に入れるためには、若い世代の人たちが希望をもって、自分たちで今とは違う未来をつくりていかなければならないということを言いたかったと思います。
- C2：わたしも同じようなことだけど、前にK先生が言ってくれたけど、当時の中国ではほとんどが農民で、ルントウはその代表だと思います。それが、いろいろなことがあってでくのぼうみたいになったので、何もやる気もなくただ生きているだけになって、何にも希望がないので、ほとんどの中国人が同じようになっているから、それじゃあいけないことに気付いてもらいたくて、「故郷」を書いたと思います。
- C3：希望ってというのがあったけど、それは全く新しい生活で、平和な生活で、孫文が言ってい



た三民主義だと思います。それで、多くの人が同じ希望をもっていけばそれは必ず実現できるということ。

T 2 : ルントウがでくのぼうみたいになった原因は何でしたか。ちょっと思い出してみてください。

C 4 : 子дукさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主がよってたかってルントウをでくのぼうみたいにってしまった。

T 3 : そうだったよね。ということは、逆に。

C 5 : 子дукさんや凶作は仕方がないけど、その他の、税が軽く、兵役もなく、身分差がなく、食料に困らない、安定した生活が魯迅の思う新しい生活です。それが、新しい生活だと思います。結局、三民主義ってということ。

T 4 : で、その三民主義とは何でしたっけ。

C 6 : 民族の独立と民主主義と安定した生活を目指したことです。

T 5 : それを実現するにはどうすればいいのかな。

C 7 : 結局辛亥革命で孫文は途中で袁世凱に譲ってしまったから、元々清朝の中央集権国家が崩れたけど、袁世凱の独裁政治になっただけだからあまり社会全体は変わらなかった。そこで、中国国民がみんな同じ目標に向かっていけば、それが道になって、希望がかなうようになるということだと思います。

C 8 : まず心の中で思わないと話が進んでいかないから、思うことが希望で、それが地上の道になっていく。中国の国民に、何も考えないで受け身のままでいいのか。これでいいのかということ問い掛けていると思います。

C 9 : それと、このままでいいのかということ問い掛けて、何か行動しなければならないと、警告しているみたいな気がします。

C 10 : 僕も同じですが、ちょっと気になるのが、このころの中国は、戦争や内乱などで、厳しかったと思うけど、こんな中国を批判した本を書いて、罰せられなかったのかと思う。

自分の考えを発表するときに、自信をもって話しているように感じられた。それは、ミニ講演で時代背景をある程度理解できたことの表れではないかと考える。単純に読み取りが深まったかどうかは比較することはできないが、少なくともC10の発言に見られるような、作者が訴えたいことだけでなく、当時の社会を考えれば、中国批判した本を書いて大丈夫なのかという疑問が出たことは、読み取りが深まった証拠ではないかと思う。

#### 4 研究の成果と課題

単元構想の中に入れた、社会科との連携がどのようなものだったのかを、生徒の感想から考えてみる。時代背景としては、中国の変革期であり、政情も不安定。その中でルントウの置かれた立場は、当時の人民の代表であること、非常に弱い立場であること、流れのままに身を任せて自らの力で何かをしようとしなかったことなどは、理解できたようだ。(資料10)

その後のホンルとシュイシヨンの関係はどのようになってほしいと望んだのかという話合いの中には、講演してもらったときの言葉などが出てくるようになった。そして、主題読みでは、魯迅がなぜこの作品を書いたのかについての理解が深まり、作品に込められた作者の思いを読み取ることの面白

さを知ったようである。

【資料10 最終感想1】

自分たちで生きていく世の中は、自分たちの手でつくりあげていくしかない。昔は仲のよかった二人も、大人になると、身分の差というものを知り、二人の間に壊しても壊しきれない厚い壁ができてしまった。なぜ二人の間に、そんな壁ができてしまったのか。ほんとうは、昔みたいに、今のホルン達のように仲良くさわぎたい。だけど、それができないのが、今の中国だから。今自分達が住んでいるところだから。変えていくよ。みんなの手で。もつともつと住みやすい、環境を、町づくりを。という気持ちで、村のみんな、中国のみんな。

【資料11 最終感想2】

わたしが思ったのは、魯迅はすべての人間に向けてこの作品を書いたのだと思います。魯迅が生きた中国の時代は、本当に最悪だったと思います。そして、①「辛亥革命」という、もう苦しまなくてもいいという国民の希望があつたけど、その希望は本当にはならず、もつと悪くなりました。ルントウは一度持った希望を最悪な形で崩されました。魯迅は、このルントウを作品を見た人に見せることによって、すべての人間は人生の中で様々な道があつて、太い道もあれば細い道もある。

(中略)

ルントウの父は食費をかせがなければならぬとか税をはらわなければならぬと思ひ、②希望など持つひまもなく働いて、ルントウもそれを見たから働かなければならないと思つて働いているのだと思ひます。でも、その中でも③例えば日本でいう一揆とかを起こして、政府に自分の考えを行動で表せば、何か変わったかもしれない。そして、それを見て育つたシュイションも、きつとルントウみたいになると思ひます。この「負の連鎖」をたぢきるためにも、④魯迅が文学作品を記して、一人でも考えをあらためれば、その考えがみんなに広がつて、一つの大きな考えになると思ひます。そうなつてほしいと考へて、⑤魯迅は全ての人間に「自分の考え」を持つてと訴へているのだと思ひました。あと、その自分の考えをもつて、道を作つてもその道が間違つた道ならば、誰かが道を正さなければならぬと思ひました。

上の最終感想は、ちょうど国語の力が伸び盛りの生徒の感想である。ミニ講演の内容と文中の言葉に自分の経験が加味されて、自分の中で再構成されて表現されている部分(文中①②)、社会科の学習を想起し、関連付けている部分(文中③)、作者魯迅の思いを推し量り、自分なりの考えとして表現している部分(文中④⑤)などが見られる。これらは、仮説で述べた段階をクリアしていると考え

【資料12 ミニ講演の感想】

られる。(資料11)

(前略)  
今まで国語と社会なんて全く関係のないものだと思つていましたが、作品が書かれたときの時代背景を知ることにより深く作品を理解できるのだなと思ひました。

また、教科連携という視点で見ると、興味深い感想もあつた。この感想は、講演会後に書かれたものであるが、本研究でねらっていることがそのままの形で出ている。(資料12)

課題としては、こうした読解力を高めるためには、一度や二度行つたからといって、簡単に身に付くものではないことを踏まえ、継続的な実践が必要である。教科連携についても、今回は社会科の先生に協力をいただいたが、なかなか授業の

進度が合わなかったことが一番の課題である。時期を逸してしまえば、生徒たちの追究意欲をそぐことにもなる。学習指導計画の中でも、導入部分ではなく、ある程度内容の読み取りが進み、多くの生徒が、なぜだろうという疑問をもったルントウがでくのぼうのようになってしまった原因を自分で考えた直後が一番であったと思う。

教材研究や打合せの中で、歴史学習で文化について学ぶときに、結構困ってしまうことがあるという話題になった。今回とは逆に、国語科から社会科への教科連携も可能であることも分かってきた。互いの壁を取り払うことで理解が深まり、読解力を身に付ける一助となるのではないかと考える。

## おわりに

初めに述べたように、本研究で言う読解力とは、いわゆる「PISA型読解力」であり、その力を付けるための教科連携を考えたものである。小学校とは異なり、中学校では教科担任制であるため、連携を図るにも制約が多い。しかし、中学校の強みは、それぞれの教科の専門家がそろっているということである。うまく活用すれば、今回の実践のように国語科だけで行う授業とは一味違った理解を成すことができる。

## 追加資料

光村図書・東京書籍発行の現行国語教科書の中で、他教科と連携できそうな題材を挙げておく。

### 【第1学年】（光村図書）

題 材 名	作者・筆者・著者	連携教科	内 容
大人になれなかった弟たちに……	米倉斉加年	社会	第二次世界大戦戦争
未来をひらく微生物	大島泰郎	理科・総合	環境問題として発展的に
江戸からのメッセージ	杉浦日向子	社会・総合	江戸庶民の生活・リサイクル

### 【第2学年】（光村図書）

題 材 名	作者・筆者・著者	連携教科	内 容
春に	谷川俊太郎	音楽	「春に」の合唱曲
五重の塔はなぜ倒れないか	上田篤	理科・総合	慣性の法則・免震構造・制震構造

### 【第3学年】（光村図書）

題 材 名	作者・筆者・著者	連携教科	内 容
挨拶-原爆の写真によせて-	石垣りん	社会	原子爆弾・第二次世界大戦

### 【第1学年】（東京書籍）

題 材 名	作者・筆者・著者	連携教科	内 容
脳のはたらきを目でみよう	川島隆太	理科	人間の体のつくり
碑	松山善三	社会	原子爆弾・第二次世界大戦

### 【第2学年】（東京書籍）

題 材 名	作者・筆者・著者	連携教科	内 容
神奈川沖浪裏	赤瀬川原平	美術・社会	浮世絵・富岳三十六景
僕の防空壕	野坂昭如	社会	第二次世界大戦

### 【第3学年】（東京書籍）

題 材 名	作者・筆者・著者	連携教科	内 容
ごはん	向田邦子	社会	第二次世界大戦

また、どの教科書でも「話す」「聞く」「書く」については、他教科との連携が十分図れるもので、工夫次第では、他教科で学んだことを題材にして実践することができる可能性をもっている。

## 【文末資料1 授業で使用したプリント】

魯迅「故郷」のころの中国

1840～42年 アヘン戦争（南京条約）

①多額の賠償金 ②領土の割譲 ③不平等条約

※ 外国人にすり寄るようにして生活する中国人

※ 賠償金・戦費の調達を「増税」でまかなう・・・苦しいのは農民（人口の9割）

1851～64年 太平天国の乱（漢民族の再興を目指す）・・・清は満州族

※ すでに清軍の力だけでは乱を押さえることはできず

※ 実はこの間にも「アロー号事件」があり英仏に踏んだりけつたりの状態

1894～95年 日清戦争（下関条約）

清の別名＝Sleeping Lion

※ アヘン戦争同様の多額の賠償金

（眠れる獅子）

### 清の弱体化を見抜いた列強が本格的に進出！！半植民地状態に！！

（清は日本の江戸時代から少し遅れて始まるがおおよそ270年続く）

1899年 義和団事件（外国人排斥運動）← 8か国が更に進出

度重なる重税

賠償金・清の軍事力強化（対外）・近代化（鉄道など）

匪賊・軍閥

自分の軍事力をもち、地方を治める（清政府の弱体化）

役人の勝手な支配

中央の力が弱くなると、地方では勝手な役人が増える

内乱・干ばつ

農作物の被害

地主による支配

多くの農民は小作農

農民の希望は・・・？

対外的には諸外国の言いなり・・・国内は混乱を極める・・・

### 辛亥革命

孫文～三民主義

○民族 満州族が建てた清を滅ぼし、漢民族の国を建てる

外国人による植民地化を改善

○民権 専制君主政治を打倒し人民の権利を尊重する 民主主義

○民生 地主による土地所有を廃止し経済を安定させる

1911年10月10日 武昌から始まる

1912年1月 南京に中華民国（北京にはまだ清朝がある）

年3月 清が滅びる（袁世凱）

### しかし・・・この後 袁世凱による独裁政治が始まる

1915年 日本による21か条の要求

1919年 五・四運動、中国国民党（孫文→蒋介石へ）

1921年 中国共産党 第一次国共合作